

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏 名

山田 裕輝

論文題目

幕末期萩藩の藩政改革と「西洋化」

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 池内 敏

委員 名古屋大学教授 古尾谷 知浩

委員 名古屋大学教授 斎藤 夏来

委員 名古屋大学准教授 河西 秀哉

委員 名古屋大学准教授 北村 陽子

委員 名古屋大学名誉教授 羽賀 祥二

論文審査の結果の要旨

【本論文の要旨】

本論文は、幕末期萩藩（長州藩）を取り巻く固有の政治環境として海外情報の急激な増加とそれに触発された藩政改革の二点を指摘し、幕末期の萩藩社会に生じた諸変化の実態をそれら二点に着目することで解明しようとする。それは、本論文序章で整理されるように、幕末期萩藩の動向が明治維新と密接に絡むものとして進められてきた戦前・戦後の研究群に対し、いったん明治維新との関連性を論じる観点から離れて当該期固有の問題に即して実態分析を進めようとする近年の研究史のながれのなかに位置づけられる。そしてとりわけ園田英弘の述べる「西洋化」「共有」なる概念に示唆を得つつ論を展開するものである。

本論文は、「第一部「共有」される西洋情報」と「第二部藩政の変容と海軍建設」に分かたれて、各三章ずつで構成されて序章と終章が付される。

序章では先行研究の整理と本論文の意図が記され、本研究が山口県文書館所蔵の膨大な毛利家文庫史料を基礎としつつ未検討史料をも随所に活用したものであることを述べる。

第一章は、萩藩における地理・歴史・政治など人文科学系の西洋の学問受容について検討し、西洋書物輪読会の定期開催や原書の翻訳が進められたことを論じ、イギリスの社会事情を網羅的に記した『英国志』を萩藩として刊行したことの意義を論じる。第二章は、第一章で述べた『英国志』が萩藩外に流布して読まれただけでなく、幕末から明治にかけて対外情勢に接する媒介として幅広い影響を与えたことを論じる。第三章は、萩藩士によるペリー来航および蝦夷地探索にかかわる情報収集のありさまを明らかにする。それは藩を越えた人的交流を伴い、収集された情報が藩の内外に伝播されて影響を与えたことを論じる。

第四章は、幕末期萩藩の海軍は、当初は平時（海運）と軍事をともに担うものとして位置づけられたこと、安政5年（1858）の大規模な軍制改革を経て文久2年（1862）の海軍所設置をもって完成したと論じる。第五章は、幕末期における萩藩士の海外渡航を杉徳輔（西欧）と高杉晋作（上海）の二つをもって具体的に示しながら、それら海外留学の成果が萩藩海軍の強化へ連動してゆくことを論じた。第六章は、万延元年（1860）アメリカ船員の下関上陸事件、同年イギリス船による長府藩役人連れ去り事件を経て、文久元年（1861）イギリス艦隊が測量目的で下関に来航するに至る間の欧米諸国と萩藩との対応について論じた。既存の幕藩関係に依存するのではなく、萩藩が自ら諸外国と直接に接触し対応せねばならない状況が生じたことの歴史的意義を論じた。

終章は、全体の総括であるとともに、幕末期の外圧とそれへの対応を理解するに際して萩藩が「外圧」を内在的に把握・消化して活用を試みたと理解する本論文の視点について再確認する。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

萩藩（長州藩）の研究は、それが明治維新の政治過程を分析する恰好の素材ということもあって膨大な先行研究の蓄積があり、それだけに新たな論点の提示は容易ではない。そうしたなか、本論文は古典的な研究から現在に至るまでの萩藩研究をなるべく簡潔に整理したうえで、西洋諸勢力からの外圧を踏まえて藩政改革を進め、やがて明治維新を進めてゆく中心的な政治勢力として成長する直前すなわち幕末期萩藩の試行錯誤のありさまを具体的に追究したものである。

先行研究の整理は、それが膨大なだけに容易ではなかったものの主要論点は網羅され、萩藩研究の現段階を理解するに資する丁寧な整理であった。しかし同時に、現時点での論点が細分化されつつあるためか、たとえば明治維新史研究という大きな研究課題のなかで本論文がどのような位置づけをもちうるのかについては鮮明さが失われ、また本論文にとって最も重要な萩藩軍制改革・教育改革にかかわる先行研究については十分な批判的検討がなされないままに具体的な実証に進んだという問題点も残された。

19世紀後半における西洋諸国との接触により様々な衝撃を受けたことはこれまでも論じられてきたが、本論文ではそうした外圧との対抗について人文科学系の学問分野の導入から論を起し、また関連する情報の収集と交流・伝播、それに基づく政治改革への志向性に着目して論じた点に新鮮さが見受けられた。それはすなわち幕末期日本における西洋認識の普遍化と共有化の筋道として萩藩における情報収集・伝播の活動を位置づけたという本論文の試みのことである。この点は高く評価できる。

一方で、本論文でキーワードとなった「西洋化」「共有」なる概念が本論文にとっての重要な先行研究である園田英弘の概念規定にしたがったものといいつながら、実際にはその規定どおりに厳密に使用されていたようには思われない。また、西洋諸国と萩藩が直接対峙することとなった経験について「国家主権」なる用語を用いて説明すること、萩藩士の蝦夷地探索の記録資料に見える「皇化」なる史料用語の解釈、引用史料の提示に際して必要以上の省略をすることによって史料解釈に疑義がもたらされる事例のいくつか見られること、こうした諸点の残されたことによって本論文の理解がいささか阻害されることとなったのは残念である。

しかしながらこうした欠点も、やがて論者自身の努力によって克服されるものと期待される。よって審査委員一同、本論文が博士（歴史学）の学位を授与されるにふさわしいものと判定した。